地域のひろば

“安心と安全の福祉のまちづくりを”

府社協 地域福祉部
TEL.06(6762)9473／FAX.06(6762)9487

マッセ・市民セミナー

高次脳機能障碍トーク&ミニライブ

～本人・家族の想いから学ぶ～

7月25日　90人が参加

心に響く歌声

府社協と大阪府市町村振興協会は、熊本県から高次脳機能障碍当事者であり歌手の一ノ瀬たけしさんとそのご家族をお迎えしてセミナーを開催しました。

はじめに、DVDでたけしさんの事故直後の状況や家族の苦悩、リハビリのようすを視聴。

引き続いて父親の純二さんから「最初は障がいを受け入れられず、家族で喧嘩ばかりだったが、回復を信じ、今では本人が好きなこと、心地よいと感じることを『うん、そうね』と家族みんなで応援し、『ありがとう』と言いあえるように」。また、「家族会では、あせらない・比べない・あきらめないを合言葉に活動している。介護者・家族が本音を語り合える時間や場がとても大切」と、ときにユーモアも交えながら家族の想いや家族会の必要性について話していただきました。

話の後にたけしさんのミニライブがスタート。純二さんから、たけしさんは短期記憶が困難なこと、歌詞を覚え、リズムにのせ、ギターも弾くということを同時に行うことがいかに困難かなど、高次脳機能障碍に関する知識を交えて紹介。たけしさんから「よく説明できました」と太鼓判を押してもらってから、歌がはじまります。中学生の時に覚えた外国の歌や昭和歌謡、オリジナル曲まで、純二さんとたけしさんの絶妙な掛け合いと歌声に、会場は笑い声と大きな拍手で包まれました。

絶妙な掛け合いによるミニライブ

交流会での語らい

交流会には約20人が参加しました。その参加者からは、当事者としての想いやセミナーの感想、家族の立場からの発言などがあり、お互いが分かり合えることの大切さを共有しました。

また、どんな支援があればよいか、との質問に、母親のまゆみさんは「最初は、自分で治療法を探すしかなかったので、パソコンを教えてもらい、ネットで専門医などを調べて連絡することの毎日だった。障がいについて一人でも多くの方に正しく知ってもらうこと、家族会やこうした交流会で仲間と出会い、話をすることで、ほっとできる」と語り、さまざまな当事者・家族・介護者の語りの場、支援者との交流の場を地域に広げていくことの必要性を確認することができました。

※大阪府では、「障がい」の表記を用いていますが、ぷらむ熊本家族会では「障碍」の表記を用いています。

連載 Vol.8

つながりで拓く地域福祉実践

～大学と地域の連携：守口市～

守口市社協では地元の大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部（以下、大学）との連携に関する覚書を締結し、とてもユニークな実践を始めています。

守口市社協と大学地域協働センターで「地域のために、なにか一緒にできないか」と相談を始めたのが昨年の7月頃。それがきっかけとなり、これまで大学が開催してきた避難所の模擬体験と守口市社協が行ってきた災害VC運営シミュレーションを今年2月に共同開催することとなりました。

当日は200人以上が参加し、防災に関する講義や新聞紙を活用したスリッパなどの防災グッズの作製、非常時向けの昆虫食試食、災害時要支援者の避難誘導訓練などを実施し、例年以上に大盛況でした。

この共同開催を契機に、守口市社協と大学で、地域課題に係る共同研究や地域福祉の推進とその人材育成、各種地域活動への参画の促進などに関する連携・協力の覚書を平成28年3月29日に締結しました。

市内全域へ広げる

防災イベントの他にも、大学の近隣地域では、大学生ボランティアと小学校の生徒、福祉委員や民生委員・児童委員が一緒に街歩きをしながら避難経路の危険箇所を点検し、避難誘導マップを作製しました。

また、孤食や不登校などを背景に、大学生ボランティアの協力を得て、子どもの居場所づくりにも今後は取り組む予定です。

守口市社協の鳥野事務局長は、「学校との連携は、大学生や子どもの親世代など若い世代に、福祉に関する理解を広げる意味でとても重要。防災グッズやマップづくり等のノウハウを市内全域、福祉関係団体にも広げ、大学・学校と社協、地域が連携した新しい地域貢献を展開していきたい」と抱負を語ります。

調印式のようす
宮本学長（大阪国際大学／左）
高岡会長（守口市社協／右）